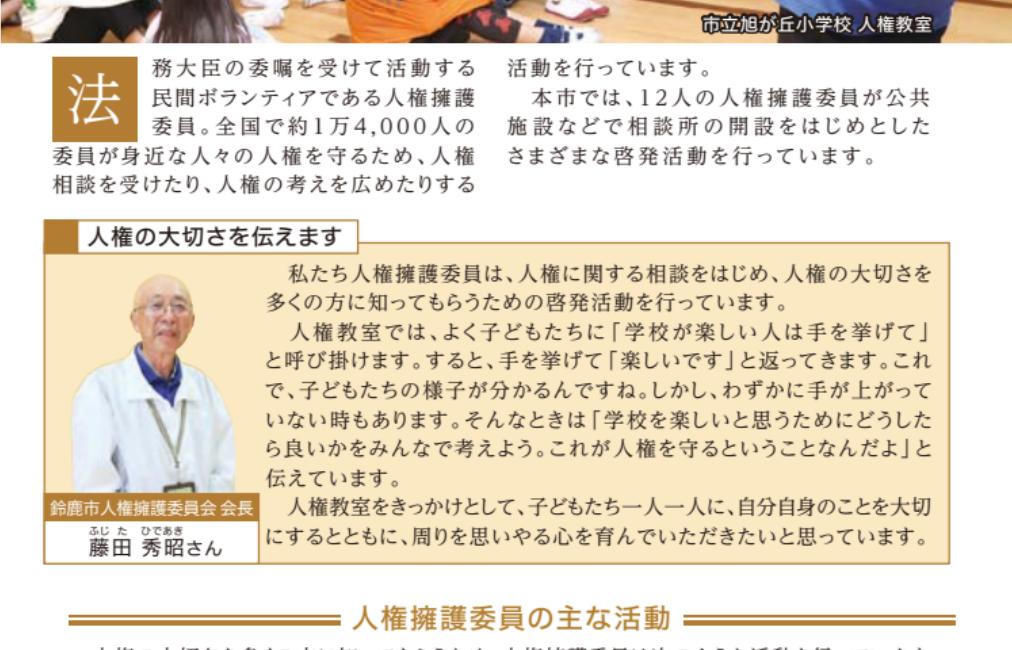


あなたの身近な人権擁護委員

人権に関するさまざまな問題について、相談者に寄り添う人権擁護委員。今回は、本市での人権擁護委員の活動などを紹介します。

人権教室

子どもたちに思いやりの心や生命の尊さを学んでいただくために、保育園や幼稚園、小学校などで、絵本の読み聞かせや紙芝居などを中心に人権擁護委員が行っています。



市立旭が丘小学校 人権教室

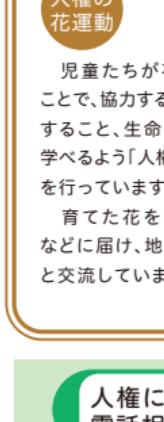
法

務大臣の委嘱を受けて活動する民間ボランティアである人権擁護委員。全国で約1万4,000人の委員が身近な人々の人権を守るために、人権相談を受けたり、人権の考え方を広めたりする

活動を行っています。

本市では、12人の人権擁護委員が公共施設などで相談所の開設をはじめとしたさまざまな啓発活動を行っています。

人権の大切さを伝えます



鈴鹿市人権擁護委員会会長

ふじた ひであき
藤田 秀昭さん

私たち人権擁護委員は、人権に関する相談をはじめ、人権の大切さを多くの方に知ってもらうための啓発活動を行っています。

人権教室では、よく子どもたちに「学校が楽しい人は手を挙げて」と呼び掛けます。すると、手を挙げて「楽しいです」と返ってきます。これで、子どもたちの様子が分かるんですね。しかし、わずかに手が上がっていない時もあります。そんなときは「学校を楽しいと思うためにどうしたら良いかをみんなで考えよう。これが人権を守るということなんだよ」と伝えています。

人権教室をきっかけとして、子どもたち一人一人に、自分自身のことを大切にするとともに、周りを思いやる心を育んでいただきたいと思っています。

人権擁護委員の主な活動

人権の大切さを多くの方に知ってもらうため、人権擁護委員は次のような活動を行っています。

人権相談

地域の皆さんからの人権に関する相談に応じています。

相談内容 人権に関する相談

(近所や家庭内の問題、職場でのハラスメント、DVなど)

費用 無料

※秘密は厳守します。

※日程は広報すずかの毎月20日号をご覧ください。

私たちは皆さんの気持ちに寄り添います。
悩んでいることがあれば、気軽にご相談ください。



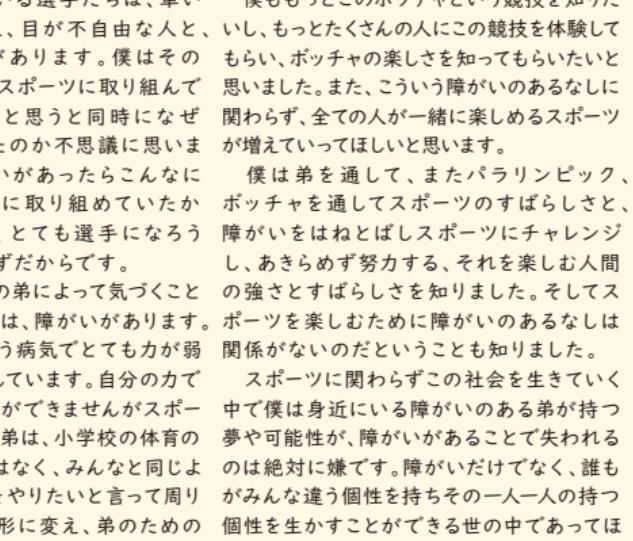
鈴鹿市人権擁護委員会
かんざき かよこ
市崎 佳代子さん

救済

「人権を侵害された」という被害者からの申告を受け、法務局職員と協力して調査に当たります。

啓発

人権教室など、人権について理解を深めてもらうための活動をしています。



人権週間に近鉄白子駅、鈴鹿市駅で街頭啓発を実施しています。市、県、法務局と一緒に、人権の大切さを呼び掛けています。

子どもの人権作文

学校で人権について学んだ児童・生徒の皆さん。自らの経験をもとに記した「人権に関する作文」について、代表作品をご紹介します。

障がいは、はねとばせる

矢橋 陸空さん

僕は2020東京パラリンピックを見てとても感動しました。なぜなら今まであまりパラリンピックを見たことがなかったけど、

今回興味を持って見て、パラリンピックに出場している選手がとても輝いて見えたからです。出場している選手たちは、車いすや腕や足がない人、目が不自由な人と、

さまざまな障がいがあります。僕はその障がいがある選手がスポーツに取り組んでいる姿を見てすごいと思うと同時になぜ選手になろうと思ったのか不思議に思いました。

もし僕に障がいがあったらこんなにも前向きにスポーツに取り組めていたかもしれません。また、とても選手になろうとは思えなかったはずだからです。

でもその疑問は僕の弟によって気づくことができました。僕の弟は、障がいがあります。脊髄性筋萎縮症という病気でとても力が弱く電動車いすで生活しています。自分の力では手も足も動かすことができませんがスポーツが大好きなのです。弟は、小学校の体育の時間で見学するのではなく、みんなと同じように一緒にスポーツをやりたいと言って周りの協力で弟ができる形に変え、弟のためのルールを作つてみんなと同じようにスポーツを楽しんでいます。スポーツは、障がいがあっても道具やルールを作ることで楽しむことができるのだと分かりました。

また、僕は弟と一緒にボッチャの体験に行つたことがあります。ボッチャとは、障がい者のために考案されたスポーツでパラリンピックの正式種目です。しかしこの競技は、老若男女、障がいのあるなしに関わらず、全ての人が一緒に競い合えるスポーツです。そして僕は、介助者として参加しました。

体验して、障がいのない人が障がいのある人をサポートして一緒に楽しめるこのボッチャという競技がすごいと思い、こんなすばらしいスポーツがあるのだと知り驚きました。

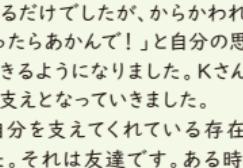
僕ももっとこのボッチャという競技を知りたいし、もっとたくさんの人にこの競技を体験してもらいたいと思いました。また、こういう障がいのあるなしに関わらず、全ての人が一緒に楽しめるスポーツが増えていると思います。

僕は弟を通して、またパラリンピック、ボッチャを通してスポーツのすばらしさと、障がいをはねとばしスポーツにチャレンジし、あきらめず努力する、それを楽しむ人間の強さとすばらしさを知りました。そしてスポーツを楽しむために障がいのあるなしは関係がないのだということを知りました。

スポーツに関わらずこの社会を生きていく中で僕は身近にいる障がいのある弟が持つ夢や可能性が、障がいがあることで失われる

のは絶対に嫌です。障がいだけでなく、誰もがみんな違う個性を持ちその一人一人の持つ個性を生かすことができる世の中であってほしいと思っています。誰もがみんな楽しみを持ち、輝ける世の中であってほしいと思います。

僕はそんな明るい未来を作る、発信する一人になりました。



友達の大切さ

椿小学校6年 棚口 蒼葉さん

僕は、低学年のとき、片目を大けがし、障がいを負いました。そのため、目の色がふつうの人とは違います。目の色変やで」「怖い」などと様々なことを言われたことがあります。僕は、そうやって目のことを言われるのがとても嫌でした。腹が立ちました。でもそのときは、何回も人から言われても言い返すこともできず、落ち込んだり、我慢したりすることしかできませんでした。そして、そんな状態が2年ほど続きました。

そんな中、あるサッカー選手のKさんと出会いました。Kさんは、自分と同じように目に障がいを持っている人で、僕の気持ちをよくわかってくれる人でした。ただ、Kさんは僕とは違うところがありました。それは、とても前向きなところです。大きなかがを負ったにも関わらず、これまでと何も変わらず、前を向いていました。僕はその人をすごいなと思い、自分も何事もポジティブな人になろうと思いつになりました。

でも、そんなに簡単ではありませんでした。失敗をすればしょんぱりし、怒られれば落ち込んでしまうこともあります。でも、そんなときにKさんの姿

を思い出すと、前より心を強く持てるようになりました。

時にはまた目のことをからかわれることもありました。今まで落ち込んだり、我慢したりするだけでしたが、からかわれても「そんなこと言つたらあかん！」と自分の思いを伝えることもできるようになりました。Kさんとの出会いが、僕の支えとなっていました。

また、別に自分を支えてくれている存在にも気が付きました。それは友達です。ある時学校で6年生の友達と廊下を歩いていると近くを通った下級生の子に、「目が変やで。こわ。」と言われました。僕はそれに言い返すと隣にいた友達が、「人それぞれあるんやから。そんなこと言つたらあかん！」と言ってくれました。その言葉は、僕には何よりもうれしい言葉でした。その時、自分が友達に支えられていると気が付きました。

ぼくは、友達を大切にしたいと思うことが多いけれど、これからは、人のことを支えられる人になっていきたくなっています。

今回の特集に関するご意見・ご感想は
教育支援課 ☎ 382-9055 ☎ 382-9053 ☎ kyoikushien@city.suzuka.lg.jp